

平成27年度  
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校



□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

(かい書ではつきりと書くこと。)

- (1) 参加することにイギがある。
- (2) 美しい文字がセイゼンとならぶ。
- (3) 一つのミスが勝負のメイアンを分けた。
- (4) 失敗をキョウクンに行動する。
- (5) 歴史をセンモンに勉強する。
- (6) ハンカチに星型のモヨウをぬいつける。
- (7) シンミツな関係を築く。
- (8) 夏に冷たい水をアびる。
- (9) 旅行で家を一週間アける。
- (10) 長いかみを一つにタバねる。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略した部分があります)

文を改変、省略した部分があります)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

突然ですが、世の中というのは、まだまだハッキリわからないこと

とに満ちあふれています。なにか新しい研究をしようとしたとき、

もちろん過去の論文を調べれば多くの前例や参考データが出てきま

す。しかし同時に、それでもカバーしきれない「未知」の部分もた

くさん現れてきます。その領域に踏み込もうとしたとき、それは、

まだ誰もやったことのない研究になります。たとえ、当時の僕のよ

うに、ふつうの学生の、どんなに小さな研究であっても、大きさに

いってしまえば「世界初の研究」になるのです。

僕の大学院での研究も、子どものアサリ——大人の貝でも赤ちゃ

ん貝でもない——稚貝の殻の成長線を調べるという点で、一応「世

界初の研究」と呼べるものでした。最終的な目標は、成長線をもと

に海の公園の子アサリたちの成長のようすを調べることでしたが、

そもそも、「子どもアサリの成長線はどれくらいのパースで刻まれ

るか」ということもわかっていなかったので、僕の研究は、その「未

知」に取り組むことからはじまりました。

こうなると、実験のやり方も自分で考えるしかありません。大人

15

のアサリについての過去の研究データや論文は、もちろん大事な参  
考資料になります。しかし、それがそのまま子どものアサリに当て  
はまるとは限らないので、あくまで参考です。

こればかりは、誰かが正解を知っているわけでもありません。い

ろいろ方法を考えて、自分たちで試してみるしかないのです。僕の

場合は、共同研究者のW先輩とアイデアを出し合いながら進めてい

きましたが、まるで無人島を冒険しているようで、とてもエキサイ

ティングで楽しい反面、いつも手探りの不安と隣り合わせの日々で

した。

僕たちの試行錯誤のようすを、ちょっとだけ紹介したいと思いま

す。

子アサリの成長線は、一日に数本のペースでできると考えられま

した。それがいったい一日に何本なのかを調べるために、次のよう

な方法をとることにしました。

まず、 1  それから

2  アサリは、目印を入れた日よりも成長し

て、殻も大きくなっているはずですが。

3   4  その結果か

ら、一日あたりの本数を計算するのです。

さて、そのためには、子アサリの貝殻にうまく目印をつける(マー

35

30

25

20

キングする)必要があります。それが僕たちにとっての課題でした。

過去の研究でも、アサリの殻にマークをつけることは行われてきました。その方法は、殻をヤスリでちよつとだけ削ったり、あるいは、冷蔵庫に入れて低温の刺激を与えることで、いつもとは違う成長線をつくらせてみたり……。しかし、どれも大人のアサリ向けに行われたものばかりで、か弱い子アサリにそのまま使えとは思えませんでした。マーキングのシヨックでアサリが死んでしまったのは、元も **X** もありません。

( A ) 僕たちは、「色」によるマーキングをすることにしました。貝殻に、分かりやすく色をつけて目印にしようというのです。

( B )、どの色素が子アサリに向いているか分かりません。そこで二種類を試してみることにしました。どちらも、貝殻の成長に無害と思われる、黄色い化学物質(テトラサイクリン)と赤い化学物質(アリザリン・コンプレクソン)です。

試す方法はこうです。まず、それぞれの色素を溶かした二種類の溶液を用意し、双方に子どもアサリを入れ、一晚その中で過ごしてもらいます。そのあと、ふつうの海水中に移して、しばらく成長させ、顕微鏡で断面を観察します。しっかりマークがついているか、マークをつけたあとも問題なく成長しているか、確認するのです。

書いてしまうと簡単な話ですが、ここまでに何度も議論を重ね、

計画を立てては修正し、アサリをつかまえて実験しているのです。で、何カ月という時間がかかっています。

どきどきしながら顕微鏡をのぞくと、無事マークが見え、マーキング後もちゃんと成長していることが確認できました。( C )、比べてみると、黄色よりも赤い色素の方がはっきりとマークできていました。赤い物質は、紫外線に反応してよく光るので、紫外線当たてみると、マークはもつとはっきり見えました。

こうして、子どもアサリのマーキングには、赤い色素、アリザリン・コンプレクソンが向いていることが分かりました。こうして、<sup>③</sup>僕は小さな課題をひとつクリアしたのです。

あとは、さきほど説明したように、マーキングしたアサリを野外で飼育して、一定期間たってから、その断面を観察してみるだけ。その結果、アサリを飼育した環境によって差はあるものの、基本的には、「一日二本」という周期で、成長線が刻まれていくことが分かりました。これは他の貝類でもよく見られる周期で、潮の満ち引きが関係しているのだろうと考えられます。

ここで紹介したのは、本当にささいな発見です。でも研究は、こーやって一つ一つ自分たちで考えて実験し、問題をクリアしていかなければ進んでいけません。

それに、どんなに小さな発見でも、あとの研究者たちの実験に役

55

50

45

40

55

70

65

60

立つかもしれません。実際に僕たちも、大人のアサリの研究をした人たちがいたからこそ、多くの知恵とヒントを借りることができました。今度は僕たちが子アサリのマーキングに向けた化学物質を見つけたことで、次に子アサリについての研究をする人は、もうその実験をくり返す必要はありません。一步進んだ状態からはじめられるわけです。

そう考えると、研究というのは、未知の大陸を、ゼロからみんな調べていくようなものかもしれません。そして、わかったことをどんどん白地図に書き込んでいくのです。「あそこには湖がある」とか、「近道はこっち」とか、「この先は行き止まり」とか……。

その作業に、なに一つムダなものなんてありません。たとえばどんなにつまらない情報でも、今まで白かった部分に書き込まれたというの<sup>④</sup>は、次に地図を見る人にとって意味があることです。僕の研究はとても地味で小さなものですが、そういう気持ちを持ってさえいけば、いつも胸を張って研究することができました。

(榊太一 『理系アナ榊太一の 生物部な毎日』)

※成長線……貝殻に刻まれる線。成長にもなって増えていく。

問一 —— 線①と同じように打ち消しを表す「未」をつけること

で一つの熟語となる漢字を次から選び、記号で答えなさい。

ア、利 イ、難 ウ、常 エ、完

問二 —— 線②とありますが、大人のアサリには用いることがで

きても子どものアサリに用いることは適切でない実験の方法が具体的に書かれた一文をぬき出し、その最初の五字を書きなさい。

問三 

1
---

4
---

 にあてはまる一文を次からそれぞれ選

び、筆者たちの行った実験の流れを明らかにしなさい。

ア、その殻の成長線を観察するのです。

イ、野外に放して生活させ、もう一度つかまえます。

ウ、野外に放していた日数のあいだに、何本の成長線が入っていたかがわかります。

エ、天然の子アサリをつかまえて、その時点での殻の表面にわかりやすい目印をつけます。

問四 X にあてはまる漢字一字を書きなさい。

問七 ——— 線④とありますが、

問五 (A) (B) (C) にあてはまる語を次からそれぞれ選び、  
記号で答えなさい。

(1) 筆者たちの実験分野においては「次に地図を見る人」とはどのような人のことですか。本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

ア、とはいえ イ、あるいは ウ、そこで エ、また

(2) 筆者たちの実験は、(1)で答えた人にとって、どのような点において意味があると言えますか。四十字以内で答えなさい。

問六 ——— 線③とありますが、この「小さな課題」をクリアする

ために筆者たちが気をつけたことはどのようなことですか。

問八 ——— 線A「世界初の研究」とありますが、筆者たちが行った実験の結果、二つの発見をすることができました。その発見とはどのようなことですか。それぞれ答えなさい。

次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、なるべく早く実験結果を出す手段を探ること。

イ、子アサリの成長に害を与えない方法を選ぶこと。

ウ、成長するアサリの様子を細かく記録すること。

エ、従来の実験にはない新たな手法を生み出すこと。

問九 本文の内容について書かれたアとオのうち適当なものにはAを、適当でないものにはBをそれぞれ解答らん<sup>らん</sup>に書き入れなさい。

ア、筆者の大学院での実験は難解で誰も成功したことになかったテーマであったため、筆者はわくわくする反面、不安を抱えながら研究の日々を送っていた。

イ、子アサリの殻へのマーキングについて、筆者は赤と黄色の両方の色素を試した上で、よりしっかりと着色し、紫外線にも強く光って反応する方を選んだ。

ウ、さまざまな実験を通して得た結果により、筆者はアサリが他の貝とは異なる周期で成長をしていくことには潮の満ち引きが関係しているのだろうと考えている。

エ、子アサリの成長について調べる手順を明らかにする中で、筆者は小さな課題を一つ一つ解決しながら地道に進んでいかなければならないことを主張している。

オ、研究とは、知らない場所を皆で手分けして調べて地図を完成させるようなものであり、研究者はもっと互いに協力して研究を進めるべきだと筆者はうたったえている。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、

本文から改変・省略した部分があります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

中学三年生の「ぼく」(優太)は小学校の頃サッカーで有名選手だったが、膝の痛みからプレーに自信が持てず、サッカー部をやめてしまい、将棋部に所属している。「美月」はぼくの幼なじみで今は「姫」というニックネームの彼とつき合っているが、うまくいっていない。「モー次郎」はぼくの将棋部の友達である。学校の帰り道、モー次郎は田んぼに落ちてしまい、着替え終えたところからの場面である。

「よし、着替え完了」

意気揚々とモー次郎は言って、引き上げた実用車にまたがった。

しかし、その恰好がひどくおかしい。上は白のカッターシャツを着て、下は体育用の緑色のジャージをはいているのだ。

「モー次郎。おまえ、先に行けよ」

「なんでさ」

かっこ悪くて、いっしょになんか帰れない。美月を見ると、笑ったら失礼だと思っているのか変に

1

顔を作っている。

「そもそも、モー次郎はなんでこっち来たんだよ」

ぼくと美月の家は美里村の北に位置している。ぼくらは美里北小



の出身なのだ。でも、モー次郎は南小の出身であって、家も南の村役場近くにある。

「今日このあと暇だから、優太くんちに遊びに行こうと思ってさ。」

駄目？

「駄目ってことはないけどさ」

ちらりと美月を見る。姫とのあいだになにがあったのか訊き出したかった。ふたりきりでそうしたことについて話すチャンスはもう来ないかもしれない。でも、モー次郎を追い返すうまい理由が見つからない。

「わかったよ。遊びに来てもいいよ」

「ほんと？ よかったあ。今日暇だったんだよねえ」

モー次郎はよほどうれしかったのか、ペダルをぐいぐいと踏んで先を急いだ。見る見るうちに十メートルほど差をつけられた。

「置いてっちゃうよ」

首だけで振り返ってモー次郎が言う。

「いいよ」

① できるなら、そうして欲しい。

「なあに？」

「なんでもないよ。それより、ちゃんと前を見ろよ」

「あー？」

「まっすぐ前を向いて進めってえの！」

「なんだって？」

「今度田んぼに落ちても助けてやらねえからな！」

「なーにー！」

「もう知らねえよ！」

最後には怒鳴り合いになった。ぼくらのやり取りを聞いていた美月が、2 笑う。

「おかしいね。優太とモー次郎くんて。なんだか漫才の掛け合いみたい」

「モー次郎が相手だとドタバタになっちゃうんだよ。あいつ人の話を聞いてなくてさ。ほんと困るよ」

「そばで見ると楽しそうだよ」

「それは見てるだけだからだよ。いつもいっしょにいると疲れるよ」

「だけど、優太くんて偉いな、と思うよ」

「どうして」

「モー次郎くんてけっこう鈍いところがあって、避けてる人もいるじゃない」

美月はそれだけ言うとすまなさそうに口をつぐんだ。

言いたいことは、なんとなくわかった。

モー次郎は同じ学年のやつらからのけ者扱いられているやつだ。

周りの空気は読めないし、白シャツにジャージという恰好でもかっこ悪いなんて気づかない。人の話は聞いていないし、聞いていないから突拍子もないことを言っていやがられる。美月はモー次郎と同じ三年B組だから、モー次郎がいつもどうい扱いを受けているか、ぼくよりももっと詳しいだろう。

そんなモー次郎とぼくが親しくしていることを、美月は偉いと褒めてくれたにちがいない。

②「でも、それはちがうよ」

口の中だけでつぶやいて、自転車のペダルを踏み込んだ。

きっとぼくはモー次郎と同じ側の人間だ。のけ者にされる側の人間なのだ。そのことを、サッカー部でいやというほど味わった。そして、膝が悪いふりをしてなんでもサボっているうちに、いつのまにかクラスの輪からはずれるようになっていた。

だから、モー次郎のことをばかにしたりするけれど、遠ざけることはできないのだ。

サッカー部時代の孤独を思い出して、なんだか  
3  
した。  
美月を黙ったまま追い抜く。

「ちよっと待って。先に行かないで」

顔を見られたくないから、立ちこぎのまま空を見た。そのとき、歌声が耳に入ってきた。美月を振り返り、モー次郎の背中を指差し

て教えてやる。

「モー次郎が歌ってるよ」

先に行くモー次郎が実用車をこぎながら、鼻歌を口ずさんでいた。曲は先週のヒットチャートでナンバーワンだったので、夏の訪れを歌うバラードだ。

美月がぼくの自転車に追いついた。その横顔をそっとうかがう。予想通り、目を真ん丸にして驚いていた。ぼくの視線に気づいた美月が感心しきった声で言う。

「モー次郎くんて歌うまいだね」

そうなのだ。モー次郎はびっくりするほど歌がうまいのだ。

ほんのふとした瞬間に、モー次郎は歌を口ずさむ。将棋盤に駒を並べながら、プールの底をデッキブラシでこすりながら、自転車をこぎながら、さりげなく歌い出す。その歌声にぼくは

4  
聞き惚れてしまう。天からの授かりものとしか思えないような、きれいな歌声をしているからだ。

ぼくの勝手な感想だけど、このバラードだって本家のバンドのボーカルよりも上手に歌えている。変な裏声や巻き舌を使わないで、のびやかに歌うからだ。聞いていて心地がいい。それでいて、なんだか泣きたくなるようなせつなさを感じる。

「モー次郎ってダメダメで  
5  
させられるやつだけど、歌っ

てるときはちょっとちがうでしょ」

「そうだね」

美月はうっとりとした表情を浮かべていた。正直、急に嫉妬してしまった。

「あいつもあれで痩せてればなあ。歌がうまくてもデブじゃさ。あ、でも、デブだから声がいいのかな。声楽家の人たちってデブじゃん」

「そんなこと言っちゃ駄目でしょ」

肩口を小突かれて叱られた。

モー次郎の歌が変わった。ぼくと美月は顔を見合わせた。なぜな

ら、モー次郎が歌い始めたのは、ぼくや美月が美里北小の卒業式で歌った『旅立ちの日に』だったからだ。

ピアノのきれいな旋律が耳によみがえってくる。シンプルだけど勇気づけられる温かい歌詞が好きだった。

モー次郎がくり返し部分を高らかに歌う。

今 別れの時

飛び立とう 未来信じて

はずむ 若い カ信じて

この広い

この広い 大空に

110

卒業式の日、歌いながら泣いたことを思い出した。しかし、そ

れと同時に、あの日涙を流していたぼくと、いまのぼくとのあいだに、埋められない溝ができてしまったことに気づいた。

小学校を卒業するときのぼくは、希望に満ちあふれていた。中学

に進んだら、サッカーで大活躍できると信じていた。小学校のサッカークラブの先生に、がんばります、と誓ってまっていた。それなの

に、いまのぼくはサッカーをやめ、左膝が痛いふりをしながら体育までサボるダメダメなやつだ。

「懐かしいね」

美月が語りかけてくる。

「そうだね」

落ち込んだまま答える。

「モー次郎くんが歌えるってことは、モー次郎くんの南小でも『旅立ちの日に』を歌ったってことだよね」

「そうなるね」

〈中略〉

「モー次郎くん、歌うまいんだね。わたしびっくりしちゃった」

「そ、そう？」

130

125

120

115

寝められて照れたのか、モー次郎は頭を掻いた。しかし、ヘルメツトの上からだ。あほだ。こいつは本当にあほだ。

「これから、優太の家に遊びに行くんでしょ？」

「そうだけど」

「わたしの家ね、優太んちのすぐそばなんだ。せっかくだから、わたしんちでココアでもどう？ 最近、ママがココアにはまってるの。健康にいいんだかなんだか知らないけど大量にあるのよね。黒豆ココア。冷たくておいしいよ。おいでよ」

美月が微笑む。しかし、モー次郎は困った顔で返してきた。

「冷たくてもおいしいの？」

「お、おいしいよ。あったかいほうがいいなら、あったかいのを作るけど」

「そう。それはよかった。あと、栗は入ってるかな」

「栗？」

ぼくと美月の声が重なった。

「え、駄目なの？ ぼくは栗が入ってるやつがいちばんおいしいと思うよ。駄目なら山菜でもいいや。鶏五目もいいなあ。うちのお母さんはいつも鶏五目を作ってくれるんだ。あれもおいしいよねえ。だけど、せっかく藤谷さんが作ってくれるっていうんだから、黒豆

でもいいかな」

美月が困惑してぼくを見る。話している内容がちんぷんかんぷんで、助けを求めてきている。こわがっているようにさえ見えた。

③でも、ぼくはいったいなにが起きているのかわかった。「はあ」

と大きくため息をついてからつぶやく。

「またかよ……」

「またってどういう意味なの」

首をかしげる美月に説明してやる。

「こいつ、聞きまちがえの天才なんだ。な、モー次郎」

モー次郎は人差し指でぽりぽりとのど元を掻いた。本人もまだわかっていないらしい。

「おまえ、飲むココアと、もち米を炊いて作ったおこわを、聞きまちがえただろ。ココアとおこわを」

あ、と言ったきり、モー次郎の表情が固まる。美月は啞然としてもぼくに訊いてくる。

「おこわって、あのもち米を蒸して作るおこわ？」

「そう」

「だから、モー次郎くんは、栗を入れるとか、山菜を入れるとか、

④鶏五目がどうか言ってたんだ……」

合点がいったらしい美月は脱力しながら頷いた。

「モー次郎って聞きまちがえがほんと多いんだよ。この前はフリスビーの話をしてるのに、投げちゃいけないなんて言い出すからなにかと思ったらクリスピーと聞きまちがえてるし、サッカーのワールドカップの勝ち負けについて話してるのに、それはどんなみそ汁なんだなんて言い出すからよく訊いてみたら、勝敗は『6』  
と言ったのを、『神のみそ汁』とまちがったらしくて」

175

「あはは」

美月が声をあげて笑う。モー次郎も大口を開けて笑った。

「わはははは」

「おまえは笑える立場じゃないだろ」

180

「モー次郎くんて面白いねえ。黒豆ココアが黒豆おこわに聞こえちゃったんだ」

美月の言葉に、モー次郎はすまなさそうに頭を掻いた。またもや

7。ほんとにこいつはあほだ。先が思いやられるよ。

モー次郎のドジ話で盛り上がりながら、ぼくらは美月の家まで行った。

185

「ちょっとだけ待ってて。家の中が散らかってないか見てくるから」  
そう言って美月は家に駆け込もうとした。ところが、突然立ち止まった。

「どうしたの」

190

近づいたぼくの足もぴたりと止まってしまった。玄関のドアの前に、姫が膝を抱えて座っていたからだ。

「オッス」

姫が言う。長い前髪が目に入るのか、小さく首を振った。それから、無造作に髪を掻き上げる。赤いピアスが目に入った。おしゃれなものにちがいないけれど、なんだか痛々しい。

195

「来てたんだ」

姫に語りかける美月の声はなぜか暗かった。

「遅かったな。バスケット部の練習って五時までじゃなかったけ」

「そうだけど……」

200

美月が姫に責められているように思えて割って入った。

「ちょっと事故があったんだよ。あいつが田んぼに落ちたんだ」

見ろというふうには、親指でモー次郎を指し示す。

「げっ。だっせえ恰好してんなあ。上が白シャツで下がジャージか

よ。おまえらよくこんなんだっせえブタと帰ってこられたな」

205

「ちょっと、暁人くん」

美月の声は怒っていた。姫はにやにや笑いながら受け流すと、ぼくとモー次郎に向かって言った。

「おまえら美月の家に遊びに来たのか」

うっとうしそうな言い方だった。むっとしたけれど落ち着いた口

210

調で言い返した。

「ちがうよ。ちょっと話が盛り上がって、ここまで来ちゃっただけさ。なあ、モー次郎。戻ろうぜ」

「あ、でも、アイスココアは？」

「うるせえよ。いったいなんの話してるんだよ」

小さな声ですごむ。⑤  
「こういうときに空気の読めないやつはほんと困る。」

「あれ、やっぱりココアじゃなくて、おこわだったの」

「あほ。いいから来い」

無理やりモー次郎の袖を引<sup>そで</sup>張って家に向かった。ぼくの家の中に入る寸前、ちらりと振り返ると、道に出て見送ってくれている美月と目が合った。いつのまにか真<sup>ま</sup>赤に染まった夕暮れの太陽が、美月を赤く染めていた。それがとてもさびしげだった。⑥  
これから姫とふたりきりになりたくない。そんなふうに見えてしかたなかった。

(関口尚 『空をつかむまで』)

※ 実用車……ここでは牛乳配達の自転車のこと。

問一  に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア、もどかしい      イ、気難しい

ウ、なれなれしい      エ、うらめしい

問二 ———— 線①に込められたぼくの思いとして最も適当なものを

次から選び、記号で答えなさい。

ア、田んぼに落ちて泥<sup>どろ</sup>のついたままのみともない恰好をした

モー次郎とはいっしょに帰りたくない。

イ、怒鳴り合いのケンカになって美月に不快な思いをさせてし

まうことはさげたい。

ウ、とつぜん来られても迷惑<sup>めいわく</sup>なので、今日は家に遊びに来てほ

しくない。

エ、美月と二人っきりになって、姫とのあいだになにがあった

のか聞き出したい。

問三   に入る言葉を次からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

ア、くさくさ      イ、つつい

ウ、いらいら      エ、くすくす

問四 ——— 線②について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

- (1) ということに対しては「ちがう」と言っているのですか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

- (2) なぜぼくは「ちがう」と考えたのですか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

問五 ——— 線③とありますが、何が「わかった」のですか、三十字以内で説明しなさい。

問六 ——— 線④の言葉の意味を次から選び、記号で答えなさい。

- ア、とまどった      イ、なっとくした  
ウ、がっかりした      エ、つかれきった

問七  6  には次の表現が入ります。に入るひらがな三字を答えなさい。

〈神    知る〉

問八  7  に入る言葉を、本文中から十字でぬき出しなさい。

問九 ——— 線⑤とありますが、どういう状況じょうきょうについて「空気の

読めない」と言っているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、美月と姫との関係がうまくいっていないのに、ぼくはその当人たちをなんとしてもふたりきりにしようとしていること。

イ、あれだけ言葉の聞きちがいを説明したのに、いぜんとしてモー次郎は「ココア」を「おこわ」だと思っていたこと。

ウ、ぼくが気をきかせて美月と姫をふたりきりにしようとしたのに、モー次郎があくまで美月の家でココアを飲むことにこだわったこと。

エ、ぼくと美月が幼なじみで仲がよいのに、あくまで仲間入りしようとしてモー次郎がいっしょにココアを飲むとする

問十 ―― 線⑥とありますが、美月が「さびしげだった」のはな

ぜだと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「ぼく」に姫のことを相談したかったのに、ユニークな人柄のモー次郎にふり回されたり、関係がうまく行っていない姫が間に入ったりして、タイミングを失って話が出来なかったから。

イ、せっかくモー次郎がアイスココアに興味を持ってくれて、三人で楽しく飲めると思ったのに、結局姫と二人で飲まなければならなくなったから。

ウ、モー次郎が田んぼに落ちたことから帰りが遅くなり、姫を待たせてしまったせいで姫の怒りを買って、モー次郎や「ぼく」に気まずい思いをさせたから。

エ、今まではクラスののけ者であったモー次郎に親しみを覚え、彼と「ぼく」との時間にやすらぎを感じていたのに、姫があらわれたことで二人が帰ってしまったから。



